

化学専攻

Department of Chemistry

概要

私たちがふだん観察している自然現象には化学変化によるものが多くあります。複雑な生命現象も、もとをたどればいろいろな化学物質の反応や相互作用に帰着します。

化学は「物質の合成、構造、性質ならびに物質間の相互作用や相互変換を研究する学問」です。日頃私たちが目にする物質は、気体、液体、固体などいろいろな状態で存在します。これらの物質はまた、互いに混じり合う、水と油のように混じり合わない、反応して別の物質に変化する、さらには他の物質の変化を促すなど、多種多様な性質をもっています。目で見て実感できる物質の性質（その中には有用な特性や有害な特性も含まれます）の奥には、それよりはるかに小さいスケールでの物質の個性、すなわち原子や分子の性質があります。化学は巨視的スケールでの性質を微視的な観点から研究する学問であるとも言えます。

私たちは、衣食住、医薬、交通・通信手段その他あらゆる場面で化学を基礎とした生産物を日常的に活用しています。最近では、情報記録材料や超伝導物質など、新素材と呼ばれる機能性物質の果たす役割が非常に大きくなっています。これらの新素材も化学の基礎に基づき、作られています。また化学物質が係わる環境問題などの、大規模な経済社会活動がもつ負の側面の解決には化学者の参加が必要です。

このように、化学は人々がふだん考えている以上に身近なもので、自然科学ならびに人間社会の発展に大きく寄与しています。化学者の果たすべき役割は今後ますます増大するでしょう。化学は物質科学の中核をなす学問です。本化学専攻ではそのような化学の基礎となる以下のような研究と教育を行っています。

化学専攻の構成と分野

当化学専攻は昭和6年（1931年）大阪大学理学部創設とともに、はじめ化学科として、5研究室で発足しました。その後発展して現在では、無機化学分野5研究グループ（1グループは学際化学講座に所属）、附属熱・エントロピー科学研究センターと総合学術博物館を含む物理化学分野7研

究グループ、有機化学分野5研究グループ（1グループは学際化学講座に所属）、これらに加えて附属研究所に属する7研究グループと併任・連携講座の5研究グループによって構成されています。その多彩な内容は化学の教育に必要な分野を網羅し、国際的な高い水準の研究を活発に展開しています。このような化学専攻から多くの文化勲章受章者（眞島利行、赤堀四郎、仁田勇、花房秀三郎）や学士院賞受賞者（眞島利行、小竹無二雄、仁田勇、赤堀四郎、千谷利三、久保田尚志、関集三、斉藤喜彦、菅宏）を輩出しました。

〔無機化学分野〕

この分野では分析化学、無機化学、および放射化学の研究を行っています。分析化学グループでは、分子や微粒子の分離と検出法の研究を行っています。生体や環境中には様々な微粒子が分布し、界面反応が機能しています。そのような界面反応の特異性を明らかにするために、液液界面における単一分子や集合錯体の反応を研究し、レーザー光、電場、磁場を用いる新しい泳動分析法の開発を進めています。無機化学と学際化学講座に所属する錯体化学の2つのグループでは金属錯体を主な研究の対象としています。両グループとも単核から多核と多彩な構造をもつ新しい金属錯体を合成し、電子スペクトル、核磁気共鳴スペクトル、X線構造解析、磁化率などによって、固体や溶液中における化学結合および立体構造と化学的性質との関係を明らかにすることを目指しています。さらに、無機化学グループでは不対電子や核スピンの織りなす磁性現象を、錯体化学グループでは錯体独特のキラリ挙動や分子認識を研究しています。放射化学グループでは、重・超アクチノイド元素の合成とその化学的性質の研究、及びパイ中間子やミュー粒子からなる人工原子（エキゾチックアトム）の化学の開拓を行っています。また、重イオン核反応や新規核現象の研究とその物性・化学研究への応用も進めています。生物無機化学研究グループでは、生体系において重要な役割を演じる金属タンパク質や金属酵素の構造と機能の研究、およびそれらの金属活性部位のモデル金属錯体の構築、さらにモデル錯体とタンパク質金属中心との構造や性質の比較検討も行っています。

[物理化学分野]

この分野では物質の構造、性質、反応の実験的研究、そしてそれらの理論的解析を行っています。物性物理化学グループでは分子性電荷移動塩、金属錯体などを対象に新規物性の探索と、その電子レベルでの理解、さらに背後にある普遍的な概念の構築を目指した研究を行っています。熱、磁気・輸送現象測定など様々な測定手法を用いて分子の凝縮相としての特徴を追跡しています。表面化学グループでは、分子が吸着した固体表面が、分子とも固体とも異なる性質を示すことに注目します。表面の化学的性質と機能性の原因を解明するために、吸着結合でできる界面準位のうち、特に非占有電子準位と、そのフェムト秒での変化をレーザー光電子分光で研究しています。物性や反応を量子力学の原理に基づいて研究する量子化学理論グループでは、スーパーコンピューターと多数のワークステーションを駆使して、新物質の設計や新現象の機構解明、生体物質に見られる特異な機能の理論的解明を行っています。これらの理論計算に必要な新しい方法論の研究にも取り組んでいます。反応物理化学グループでは、走査プローブ顕微鏡の新しい手法を開発し、単一分子からナノスケールの反応ダイナミクスを解明しています。さらに単分子の反応や物性に基づく少数分子素子を構築し、バルクの分子集合体とは異なる新しい機能の発現を目指しています。生物物理化学グループでは、タンパク質の立体構造とそのダイナミクスを時間分解振動分光法を用いて研究しています。タンパク質の動きをリアルタイム観測することによって機能発現の分子メカニズム解明に挑んでいます。附属熱・エントロピー科学研究センターでは、独自の精密熱科学を分子科学や構造科学へと展開し、多体系を対象としたマイクロとマクロの融合分野を開拓しています。特異な固体や吸着単分子膜など新奇凝縮相で見られる同位体置換効果や量子効果を、熱測定や中性子散乱、X線解析などをもとに体系化しようとしています。総合学術博物館の研究グループでは、固体内部に形成されるマイクロな空間に閉じ込められた分子集合体の構造や物性を研究しています。分子集団が微小空間で示す特異な構造変化、相挙動、拡散現象や触媒反応などを、核磁気共鳴分光法や分子シミュレーションを使って調べています。空間の大きさや形状と分子間に働く相互作用との関係を明らかにすることで、新しい機能をもった分子集合体の創製を目指します。先端機器開発グループでは、最先端の研究教育機器の開発を通じて、ものづくりに根ざした表面物理化学研究を行っています。

特に独自の先端機器を開発しながら、原子や分子により構成される粒子ビームが固体表面で

引き起こす化反応素過程について研究し、その制御を目指しています。

[有機化学分野]

生体を構成し生命を維持する天然有機化合物や私たちの日常生活に役立つたくさんの人工有機化合物が有機化学の研究対象です。物性有機化学研究グループでは物性科学における新分野創成を目指して、単一～少数有機分子の電気・光物性とそれらがナノ粒子、ナノロッド、ナノカーボンおよびリソグラフィーで作成したナノ構造体と複合化してできた高次複合体素子の特性を研究しています。構造有機化学研究グループでは、分子量の比較的大きい新規な拡張型パイ電子系化合物や人工超分子の合成を行い、それらの構造と物性・機能の相関を研究して興味ある新物質の開発を目指しています。また、これらの共役分子の新しい合成法の開発も研究しています。天然物有機化学研究グループでは、生体のなかの糖分子と脂肪酸などが結合してできている複合糖質と呼ばれる化合物群を中心に、さまざまな作用を示す自然界の新しい化合物を探索して、その構造、合成ならびに生体における働きを研究しています。有機生物化学研究グループでは、糖鎖および糖タンパク質を精密に化学合成する方法を開発するとともに、得られた糖タンパク質を用いて生化学的、および有機化学的な方法を組み合わせて糖鎖の機能を調べる研究をおこなっています。学際化学講座に所属する生体分子化学研究グループでは、生体膜を構成する分子や、生体膜に作用する生物活性分子を対象にして、それらの三次元的な構造とはたらきを主にNMRという手法を使って明らかにする新しい方法を中心に研究しています。

これらのグループのほかに協働講座として、産業科学研究所に半導体材料・プロセス研究室、バイオナノテクノロジー研究室、精密制御化学研究室、機能物質化学研究室内の4研究グループがあり、蛋白質研究所には蛋白質有機化学研究室、機能構造計測学研究室、機能・発現プロテオミクス研究室内の3研究グループがあります。さらに、併任・連携講座として国立研究開発法人産業技術総合研究所の3研究グループと(株)ペプチド研究所、公益財団法人サントリー生命科学財団生物有機科学研究所があります。

それぞれの研究分野で活発な研究活動が行われており、さらに詳しい内容は次の各研究室紹介をご覧ください。

化学専攻のホームページ

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/graduate/chem/index-jp.html>

化学専攻目次

■無機化学講座

1. 分析化学研究室
2. 放射化学研究室
3. 無機化学研究室
4. 生物無機化学研究室

■物理化学講座

5. 物性物理化学研究室
6. 表面化学研究室
7. 量子化学研究室
8. 反応物理化学研究室
9. 生物物理化学研究室
先端機器開発グループ

■有機化学講座

10. 構造有機化学研究室
11. 物性有機化学研究室
12. 天然物有機化学研究室
13. 有機生物化学研究室

■学際化学講座

14. 生体分子化学研究室
15. 錯体化学研究室
16. 附属熱・エントロピー科学研究センター（協力講座）
17. 総合学術博物館資料先端研究室（協力講座）
18. 全学教育推進機構（協力講座）
19. ラジオアイソトープ総合センター（協力講座）

■産業科学研究所(協力講座)

20. 半導体材料・プロセス研究室
21. バイオテクノロジー研究分野
22. 精密制御化学研究室
23. 機能物質化学研究室

■蛋白質研究所(協力講座)

24. 蛋白質有機化学研究室
25. 機能構造計測学研究室
26. 機能・発現プロテオミクス研究室

■連携講座

27. 国立研究開発法人
産業技術総合研究所
無機機能材料研究部門
28. 国立研究開発法人
産業技術総合研究所
無機機能材料研究部門
29. 国立研究開発法人
産業技術総合研究所
電池技術研究部門
30. 株式会社ペプチド研究所
31. 公益財団法人 サントリー
生命科学財団生物有機科学研究所

各グループの研究案内

Department
of
Chemistry

分析化学研究室

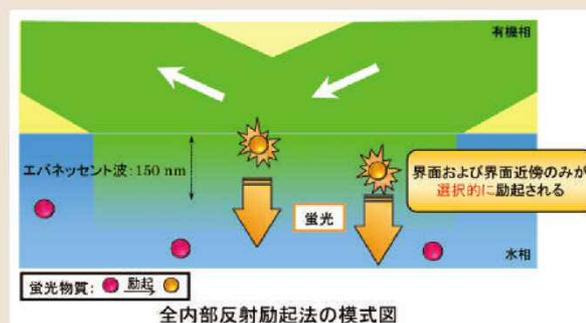
スタッフ 塚原 聡 (教授)、諏訪雅頼 (助教)、山本茂樹 (助教)

【研究テーマ】

- 1) 液液界面における金属錯体の集合体の高感度顕微分光分析
- 2) 疎水界面におけるタンパク質の変性機構の解明
- 3) 液液界面の物質通過速度の測定と高分離性界面の構築
- 4) パルス磁場を用いる磁気光学顕微分析法の開発
- 5) 磁気泳動法による微粒子分離分析法の開発
- 6) ラマン光学活性による溶液中キラル分子の構造解析
- 7) 振動スペクトルの量子力学計算

生体や環境中では、分子の多くが集合体または微粒子として存在し、主要な反応は界面で起こっています。私たちは、液液界面分析と微粒子分析をキーワードとして、新しい原理の分離法・計測分析法の開発と分析化学の新領域の開拓を進めています。数ナノメートルの厚さの液液界面で特異的に起こる不均一な反応や現象を解明するために、光学顕微鏡と各種の分光法を組み合わせた新しい計測法を開発しています。また、血球、DNA、タンパク質、細胞等、ナノメートルからマイクロメートルの微粒子の新しい分析法として、電場、磁

場等の微小作用力を用いて、単一微粒子ごとの分離と物性計測を実現する新規なマイクロ分析法を開発しています。タンパク質の溶液中二次構造や、光学活性な薬剤分子の絶対配置と光学純度を解析できる、新たな構造解析法の確立を目指し、ラマン光学活性分光法の装置開発、実験、量子力学計算を用いた解析についての研究を行っています。



Department
of
Chemistry

放射化学研究室

スタッフ 篠原 厚 (教授)、笠松良崇 (講師)、二宮和彦 (助教)

[研究テーマ]

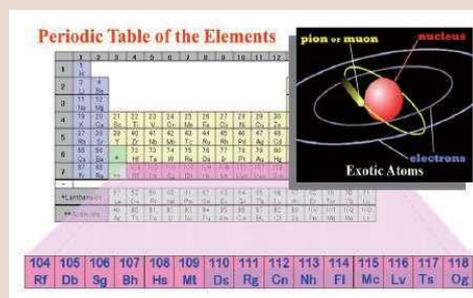
- 1) 超・重元素の化学的・核的性質
- 2) エキゾチックアトム形成機構とその化学
- 3) アルファ線核医学治療に向けた医学用放射性核種の開発
- 4) 福島原発事故に起因する放射性核種の環境動態
- 5) その他：核壊変とその化学効果、中高エネルギー中性子核反応など

私たちの研究室では、「新しい原子の創造—エキゾチックアトムと超重元素の化学—」を旗印に、ここにあげたテーマの研究を進めています。

どこまで重い元素が存在するか？ 相対論効果の化学への影響は？ 5f, 6d, 7pそしてg-電子の化学とは？ 超重元素領域には化学のフロンティアが広がっています。しかしながら、原子番号が100番を超える領域では、原子核の寿命も短く生成量も極端に少ないため、必然的に一個の原子を扱う化学となります。

私たちは、加速器や放射能を利用して「単一原子の化学」の技術的・化学的基盤を築くと共に、この「超重元素領域の化学」の開拓を進めています。

原子は、正電荷を帯びた原子核と負の電子からなりますが、他の正や負の粒子の組み合わせからでも原子系は形成されます。私たちは、このような新しい人工原子（エキゾチックアトム）の形成機構を解明し、特にミュオンによる新奇な元素分析法の開発や、「第2世代物質系の化学」の創造を目指しています。

Department
of
Chemistry

無機化学研究室

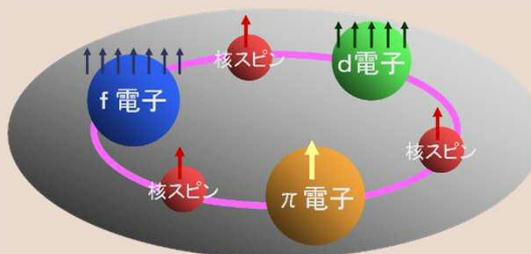
スタッフ 石川直人 (教授)、福田貴光 (講師)、冬広 明 (助教)

[研究テーマ]

- 1) f電子系、d電子系、n不対電子系を有する分子系の電子構造や分子磁性の基礎的研究
- 2) 励起環状n電子系とf電子系の相互作用(J-L相互作用)についての基礎研究
- 3) 希土類単分子磁石などの新しい分子素子の開発とその制御についての基礎研究
- 4) 新しい配位構造を持つ錯体の合成と磁性
- 5) 磁気異方性や磁気緩和時間の異なる複数の磁気サイトを有する系の量子状態時間発展の解明
- 6) 積層n電子系の多段階酸化還元で生じる特異な電子励起状態

「金属錯体」や「超分子構造体」は様々な種類の「不対電子」を分子内に持つことができます。これらの「不対電子」は磁気モーメントを持ち、磁性の原因となります。また原子核もそれぞれ特有の磁気モーメントを持ちます。これらの磁気モーメントは互いに作用しあい、複雑な量子状態を形成します。この相互作用によって多様な磁気的性質が生み出されます。また、このような相互作用をコントロールすることにより、

新たな機能や性質を持った化合物を作り出すことができます。本研究室では、多様な形式のスピンのもつ分子磁性物質群の新しい研究分野の開拓をめざしています。



Department
of
Chemistry

生物無機化学研究室

スタッフ 船橋靖博 (教授)、野尻正樹 (講師)、畑中 翼 (助教)

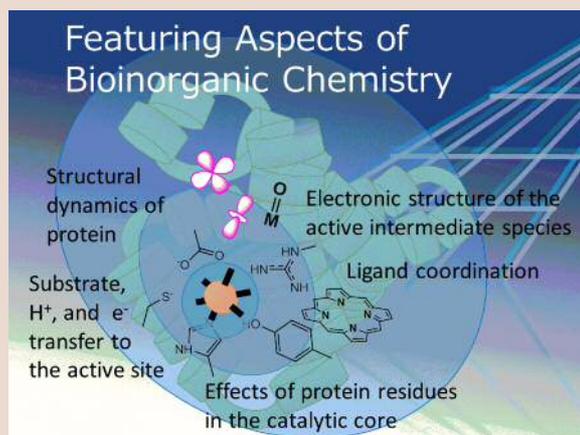
【研究テーマ】

- 1) 二核および多核遷移金属錯体の合成と分子活性化
- 2) 異種金属多核錯体の合成と分子活性化
- 3) 光増感能を有する新規金属錯体の合成
- 4) 分子活性化を行う人工金属酵素の開発
- 5) 金属蛋白質の機能と構造の相関の解明
- 6) 抗がん活性のある金属錯体の合成とその薬理作用

生体内のエネルギー伝達と物質変換の過程では、光励起と電子伝達、ならびに分子変換の各反応が見事に連携しています。蛋白質中の狭小空間内に活性な金属部位があり、それを中心にそれらの反応を円滑に行って機能を発揮しています。天然の金属蛋白質と人工的に合成した金属錯体は、その性質にしばしば共通点が見られます。

金属イオンは基本的にルイス酸で、酸化還元挙動を示すものもあり、有機物である配位子と結合した金属錯体は設計次第でその性質が制御できるほか、光エネルギー利用に必要な光増感能を獲得するものもあります。これらの性質は、光合成や呼吸や代謝、酸素や窒

素の活性化などで生体内で利用されています。さらに金属錯体は抗がん活性のような薬理活性を示すものもあります。以上の様な金属と生命の関わりを理解する研究と、関連した金属を含む機能性錯体や金属酵素を新規に開発します。

Department
of
Chemistry

物性物理化学研究室

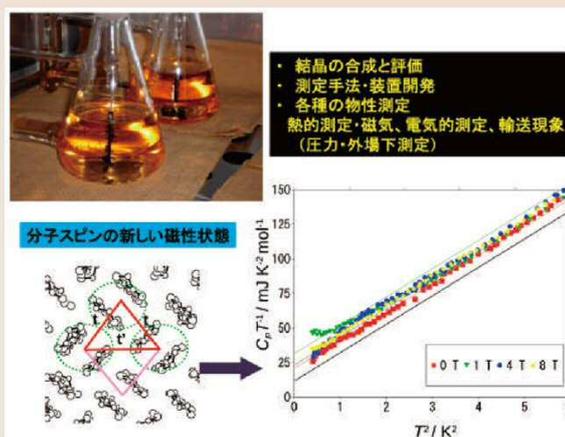
スタッフ 中澤康浩 (教授)、坪 広樹 (准教授)、山下智史 (助教)

【研究テーマ】

- 1) 分子性超伝導体の相転移、励起機構の解明
- 2) 強い電子相関効果に由来した新規量子現象の探索
- 3) 金属錯体、分子性磁性体の特異な磁性現象
- 4) 外部環境制御による量子現象の探索

物質は数多くの分子が集合した凝集体です。その中では、互いの分子間、原子間に働く相互作用が複雑にからみあってそれぞれの固有のマクロな性質を作り上げています。これらの相互作用は個々にはそれ程大きなものではありませんが、協力現象として劇的な広がりをみせ、超伝導や強磁性のような様々な相転移を起こします。スピンや電荷、分子運動など種々の自由度が関係してくるため、その理解を進め、新しい現象を探索するためには統計熱力学的な観点からの情報が重要です。また、積極的に外場や圧力をかけたりして環境を変化させていった場合に、これらの性質がどのように変化していくかは、興味もたれます。当研究室では、独自に作製した装置を用いて“微量測定 (10 μ g-1mg 試料)”、“絶

対値評価”、“外部環境制御下”カロリメトリーを中心に、分子性物質の様々な物性を研究しています。新しい現象の探索、その基礎化学的な理解を通して、さらにその奥にある自然のミステリーに迫りたいと思っています。



Department
of
Chemistry

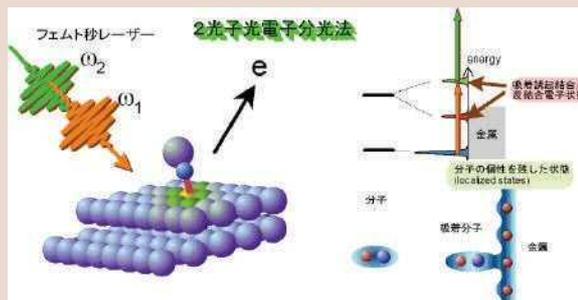
表面化学研究室

スタッフ 加藤浩之（准教授）、山田剛司（助教）

[研究テーマ]

- 1) 有機薄膜の顕微光電子分光
- 2) フェムト秒時間分解2光子光電子分光

分子が固体表面に吸着すると、吸着結合を反映した新たな結合、反結合準位ができます。吸着誘起の占有準位に正孔が入る、または、非占有準位に電子が入ることが表面での化学反応性や電気伝導性などの機能性の鍵です。本研究室では、フェムト秒レーザー光を用いた「2光子光電子分光法」で表面の占有・非占有準位を測定することから吸着分子の化学的性質の理解に迫ろうとしています。また、レーザー光を用いた顕微光電子分光装置を開発しています。顕微での高分解能光電子スペクトルと非占有準位の測定、フェムト秒時間分解測定を用いて機能性発現機構を研究しています。

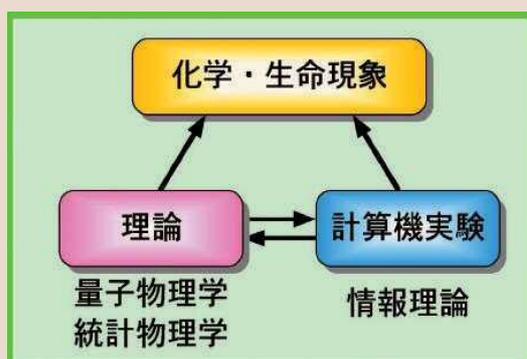
Department
of
Chemistry

量子化学研究室

スタッフ 奥村光隆（教授）、山中秀介（准教授）、川上貴資（助教）

[研究テーマ]

- 1) 分子集合体の構造・電子状態理論
- 2) ナノ表面の電子状態および化学反応
- 3) 生命現象の理論的解明
- 4) 同上物質系の機能・物性解明



当研究室は化学系研究室の中で「理論と計算」を用いて研究を行っている唯一のグループです。量子論、物性理論、化学反応論、情報理論などを基礎に化学現象の電子・分子に立脚した理論的解明を行い、コンピューターグラフィクスなどの可視化技術などを用いて、原子・分子レベルで化学現象を理解することを目指しています。特に現在、ナノ反応場における化学反応現象に注目してその機構解明と新規物質系創成に向けた研究を行っています。

Department
of
Chemistry

反応物理化学研究室

スタッフ 松本卓也(教授)、大山 浩(准教授)、蔡 徳七(講師)、大塚洋一(助教)

【研究テーマ】

- 1) 時間分解静電気力顕微鏡による電子移動ダイナミクス
の研究
- 2) 分子認識力顕微鏡によるタンパク質からの配位子
引き抜き反応の研究
- 3) 酸化・還元反応ネットワークに基づく分子エレク
トロニクスの構築
- 4) 分子-分子反応の多次元立体ダイナミクスの研究
- 5) 配向制御したラジカル-分子反応の研究

分子模型を扱うように、ひとつひとつの分子の形、向き、場所を決めて化学反応を調べてみたい・・・これは、かつて化学者の長年の夢でしたが、今では現実となっています。走査プローブ顕微鏡は、分子一つ一つを見たり、動かしたりできる手法です。本研究室では、「極微細反応化学」をキーワードに、走査プローブ顕微鏡を駆使して、単一分子からナノスケール

における分子認識反応や電子移動反応を研究しています。このような分子ひとつひとつの性質が現れる大きさでは、分子集合体とは著しく異なる振る舞いがみられます。微小な反応場を設定することにより、少数分子が織りなす新しいナノ化学や分子エレクトロニクスの開拓を目指しています。

Department
of
Chemistry

生物物理化学研究室

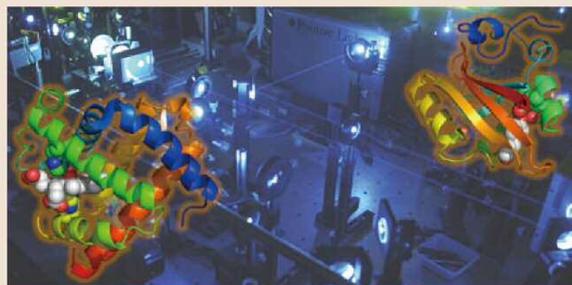
スタッフ 水谷泰久(教授)、石川春人(講師)、水野 操(助教)

【研究テーマ】

- 1) タンパク質の構造変化と機能発現
- 2) タンパク質内のエネルギー伝達
- 3) 柔らかな分子の科学
- 4) 時間分解分光法の開拓

私たちの研究室では、タンパク質の構造ダイナミクスを調べ、その機能発現機構について研究しています。タンパク質は「かたさ」と「やわらかさ」をあわせ持つところに特徴があり、安定な立体構造を保ちつつも、その構造を柔軟に変化させます。この柔軟性はタンパク質機能発現の源になっています。特に、ヘモグロビンに代表されるアロステリックタンパク質では、構造を大きく変化させることによって活性のコントロールがなされています。したがって、タンパク質がいかに構造を変化させるかということは、機能発現機構の解明に直結した重要な問題です。私たちは種々の時間分解分光法、特に共鳴ラマン分光法を使って、機能する際に起きる構造変化を研究しています。ピコ秒からミリ秒にわたるタンパク質の多彩な構造ダイナミクスを詳細に調べることによって、巧

みに機能する仕組みを明らかにする、さらにそこから一般性のある原理を導きだすことが私たちの研究の目標です。そのためには新規な測定装置の開発も必要となります。私たちは、分光法の特徴をシャープに活かすことによって、私たちの方法でしかできない研究を進めています。



Department
of
Chemistry

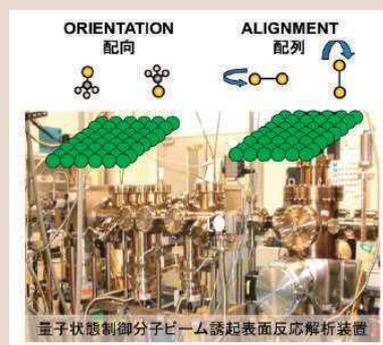
粒子ビーム化学研究室

スタッフ 岡田 美智雄 (教授)

[研究テーマ]

- 1) 配向および配列分子ビーム法による表面化学反応立体ダイナミクスの解明
- 2) 赤外分光法・光電子分光法等の表面分光法を用いた金属・半導体表面化学反応の解明
- 3) 放射光施設SPring-8を利用したX線光電子分光による表面化学反応過程の解明
- 4) 固体表面の低次元性にともなう相転移現象とその機構解明
- 5) 合金表面を用いた電子状態のチューニングによる表面化学反応制御
- 6) 超低速イオンビームを用いた新しい二次イオン質量分析法の開発とその応用

粒子ビーム化学研究室では、最先端の研究教育機器の開発を通じて、ものづくりに根ざした表面物理化学研究を行っています。特に独自の先端機器を開発しながら、原子や分子により構成される粒子ビームが固体表面で引き起こす化学反応素過程について研究し、その制御を目指しています。

Department
of
Chemistry

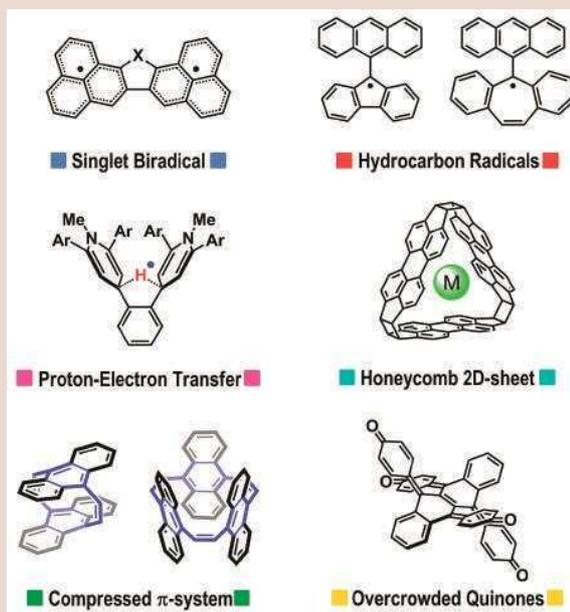
構造有機化学研究室

スタッフ 久保孝史 (教授)、平尾泰一 (助教)、西内智彦 (助教)

[研究テーマ]

- 1) 開殻電子構造を有する分子の電子状態と固体物性に関する研究
- 2) プロトン-電子連動系に関する研究
- 3) 分子性ハニカム二次元物質の合成と電子状態に関する研究
- 4) n 電子密集型分子の合成・物性研究
- 5) 立体的に混み合ったキノン類の合成・物性研究

特異な分子構造を有する化合物には特異な電子構造が宿る。構造有機化学は自然界には存在しない新規な化合物を創出し、その化合物を通じて新たな物性や機能を追求する学問であると考えています。我々の研究室では独自の分子設計に基づく新規 n 電子系化合物を基盤として、有機合成を中心とした研究を行っており、新たな化合物に秘められた特異な物性の解明や機能の探索も積極的に行っています。



Department
of
Chemistry

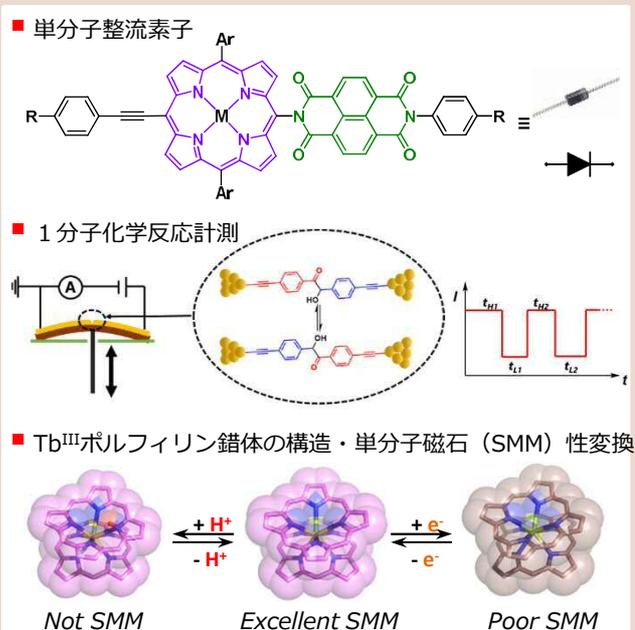
物性有機化学研究室

スタッフ 小川琢治（教授）、山下健一（講師）、谷 洋介（助教）

[研究テーマ]

- 1) 単一分子の科学：分子エレクトロニクスと1分子の化学反応
- 2) 反芳香族化合物の機能開拓
- 3) (反)芳香族化合物の対面型集積による新機能開拓
- 4) 発光性分子の開発：固体発光とメカノクロミズム

生命と物質の間に存在する大きなギャップは、人類の長い間の研究テーマである。個々の分子が独自の機能を持ち、それらが合目的に相互作用し合うシステムができれば、生命と物質の間の大きなギャップを越えることが出来るのではないかと考えている。われわれは、こうした長期的な展望の元に、有機分子の機能性を最大限に発揮させる研究を行っている。

Department
of
Chemistry

天然物有機化学研究室

スタッフ 深瀬浩一（教授）、樺山一哉（准教授）、下山敦史（助教）、真鍋良幸（助教）

[研究テーマ]

- 1) 免疫機構を制御する微生物ならびに宿主由来分子の合成と機能研究
- 2) 糖鎖の効率的な合成法に関する研究
- 3) 糖鎖や蛋白質のバイオイメージング

様々な生物活性分子の中でも、免疫、感染、アレルギー、癌化など生体の防御や恒常性維持に関する重要な生命現象に関わる分子を主な研究対象として、国内外の共同研究者と協力しつつそれらの機能や役割を明らかにする研究を行っています。特に細胞表面に存在する糖を含む化合物群は、生体内における様々な認識に関与しており、有機合成化学を主としたアプローチにより、活性鍵構造の同定と

活性発現機構の解明や生体反応の制御を目指した研究を展開しています。また生体分子の動的挙動を解明するために、バイオイメージング研究を展開しています。

Synthesis of bioactive molecules

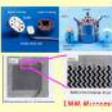
- Glycans
- Glycoconjugates
- Lipids
- Peptides
- Protein conjugates



E. coli lipid A

New reactions and synthetic methods

- Glycosylation
- Microflow synthesis
- Bio-conjugation
- Cell-engineering



SMM Microreactor

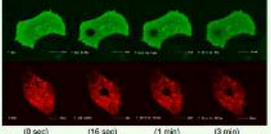
Bio-functional studies

- Immune regulation
- New cancer treatment vaccine targeted α -therapy



Toll like receptor 4 (TLR4)
MD2
Host cell
Immunomodulation

- Bio-imaging dynamics and bio-distribution



IR-GFP
Cav1-GFP
10 sec Probesch
16 sec Blood
1 min Probesch
3 min

Department
of
Chemistry

有機生物化学研究室

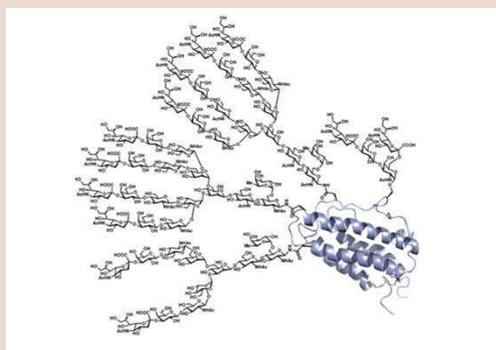
スタッフ 梶原康宏 (教授)、岡本 亮 (講師)、真木勇太 (助教)

[研究テーマ]

- 1) 糖ペプチド、糖タンパク質の精密化学合成
- 2) 糖鎖、ペプチド合成のための新規反応の開発
- 3) 糖鎖機能解明

生体内には、代表的な三つの鎖が存在します。核酸、タンパク質を構成するポリペプチド鎖、そして糖鎖です。しかし、糖鎖は、生物の種類によって特異な構造を示し、また、同じ生物種であっても細胞の状態に依存して糖の配列、分岐様式などを可変するため、その詳細な糖鎖機能を調べるのが望まれています。有機生物化学研究室では、有機化学合成および生化学的、分析化学的手法を用いて、糖鎖機能を解明する研究を展開しています。ヒトの体内のタンパク質の多くは図のような糖鎖が結合した糖タンパク質です。糖鎖は、タンパク質の3次元構造、細胞内輸送、抗原性、血中安定性を制御しています。

この合成では、糖鎖とペプチドがつながった糖ペプチドを合成し、それらを連結していくことで目的とする糖タンパク質のポリペプチド鎖を合成します。そして、タンパク質に特異的な3次元構造を形成させることで合成が完了します。得られた糖タンパク質は、その構造を核磁気共鳴法等で調べるとともに、生理活性をも評価し、糖鎖構造とタンパク質の機能発現の関係を調べています。

Department
of
Chemistry

生体分子化学研究室

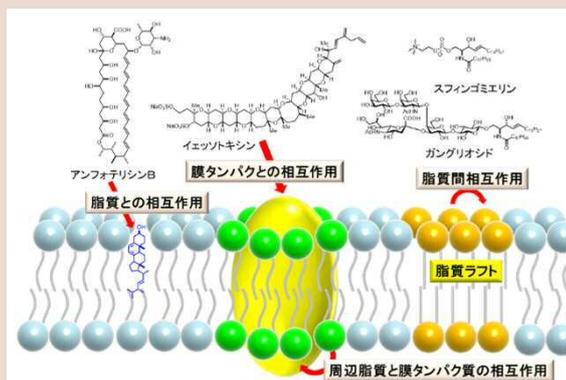
スタッフ 村田道雄 (教授)、花島慎弥 (講師)、梅川雄一 (助教)

[研究テーマ]

1. 生体膜に作用する薬物や天然物の作用機序
2. 脂質分子の膜環境下における精密な構造と機能
3. 脂質ラフトにおける脂質やタンパク質の会合機構
4. 特異な生物活性を有する天然有機化合物の化学合成

薬物や毒素などの外来性の生理活性物質と、脂質など生体に本来存在する内在性分子を主な研究対象とし、これらの化合物の生体膜における働きを分子レベルで解明する研究を行っています。生理活性物質の一部は、細胞膜中のコレステロールをはじめとした脂質分子と動的な会合体を形成して生理活性を発現することが知られています。生体分子化学研究室では、多様な化学構造を持つ生理活性物質や内在性分子を化学合成しています。さらにこれらの合成分子を使った特別な分光学的手法を用いて、

薬物や天然物の作用機序の解明を進めています。また、生体膜の脂質分子の膜環境下での動的な構造や、脂質同士、脂質とタンパク質との会合状態を詳しく調べることで、生体膜中の機能ドメインである脂質ラフトの研究を進めています。



Department
of
Chemistry

錯体化学研究室

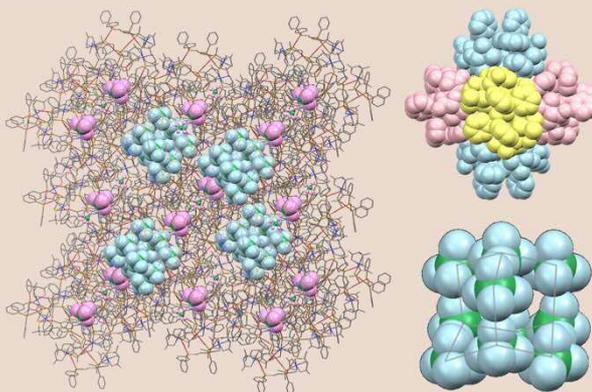
スタッフ 今野 巧 (教授)、吉成信人 (准教授)、栗村直人 (助教)、小島達弘 (助教)

[研究テーマ]

- 1) 非クーロンカ支配型イオン性固体 (NCIS) の創製
- 2) 錯体配位子をベースとする異種金属多核構造の構築
- 3) 金属錯体のキラル認識と自己集合化の研究
- 4) 硫黄架橋多核錯体の構造制御と物性に関する研究

新しいタイプの単核、多核、超多核金属錯体の合成、ならびにそれらの示す特異な立体構造、電子状態、諸物性の解明に関する研究を行っています。特に、従来の無機配位子や有機配位子を用いる錯体化学から金属錯体自身を配位子として用いる錯体化学への展開を進めています。この手法を用いることにより、アミノ酸のような単純な化合物から段階的、合理的、立体選択的、かつキラル選択的な混合金属多核錯体や金属超分子の開発を行うとともに、この種の金属化合物に取り込まれる遷移金属イオンの新規な結合様式や異常な電子状態の発現を探索しています。最近では、新たな構造概念をもつイオン性

固体 (NCIS) の構築と新規物性に関する研究に着手しており、錯体カチオンと無機アニオンが別々に異常集積化した「電荷分離型NCIS」などの創製に成功しています。

Department
of
Chemistry

熱・エントロピー科学研究センター

スタッフ 中野元裕 (教授)、宮崎裕司 (准教授)、長野八久 (講師)、高城大輔 (助教)

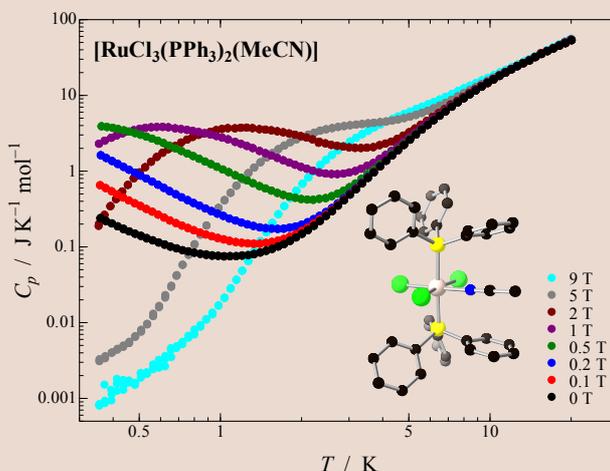
[研究テーマ]

- 1) 分子磁性体の磁気的挙動、相転移とスピン間相互作用の研究
- 2) 生体分子や高分子のダイナミクス、水との相互作用に関する熱力学的研究
- 3) 生命現象への熱力学的アプローチ
- 4) 化学結合の熱化学的研究
- 5) 単分子膜の熱力学的挙動と構造、ダイナミクスの研究
- 6) 溶液の高次微分熱力学量に関する研究

物質界の、とりわけ凝相系の本質を究めるため、熱力学量であるエネルギー・エントロピーを正確に測り、構造・物性に関する知見を最大限に生かすことで、独自の構造熱科学を展開しています。

分子間相互作用のバランスが織りなす「秩序と乱れ」をキーワードとし、化学熱力学と分子科学の融合を目指しています。研究対象は、金属などの堅いものから有機物や生体分子などの柔らかい系、単分子膜、

水溶液、生物個体にいたるまで、多種多様に及びます。



$S = \frac{1}{2}$ 化学種 $[\text{RuCl}_3(\text{PPh}_3)_2(\text{NCMe})]$ の磁気熱容量

Department
of
Chemistry

資料先端研究室

(総合学術博物館)

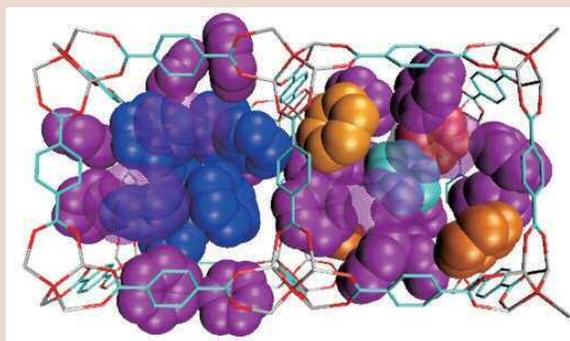
スタッフ 上田貴洋 (教授)、豊田二郎 (准教授)、宮久保圭祐 (准教授)

[研究テーマ]

- 1) ナノ空間に閉じ込められた凝縮相が示す物性と分子間相互作用に関する研究
- 2) ミクロ細孔を用いた分子配列制御と新規物性・機能の探索
- 3) NMR法による新しい細孔分析法の開発
- 4) NMRによる新規年代測定・産地同定法の開発
- 5) 博物館データベースの構築

固体内に構築されるミクロな空間では、異種の分子間相互作用が拮抗して起こります。その空間に閉じ込められた凝縮相の構造や性質、吸着分子の化学反応などの解明が主要な研究テーマです。ナノ空間で繰り広げられる多彩な化学現象を、主に固体核磁気共鳴 (NMR) 等の最先端の実験技術を駆使して研究しています。

さらに、文化財科学(年代測定・産地同定)への固体高分解能NMRの応用を目指すとともに、学術情報のデジタルデータベース化に関する研究も行います。



分子動力学計算により得られた多孔性亜鉛錯体 (IRMOF-1) 中のベンゼンの吸着構造

Department
of
Chemistry

全学教育推進機構

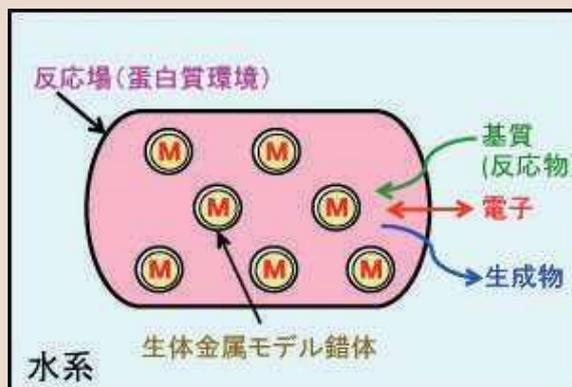
スタッフ 山口和也 (教授)

[研究テーマ]

- 1) 生体金属モデル錯体の機能発現に関する反応場の検討
- 2) 複核金属酵素の機能改変
- 3) 生体金属錯体を利用した新規材料開発

生体内には様々な金属イオンが存在しており、生命活動において重要な働きを担っています。この金属イオンの機能を解明するために、当研究室では、生体金属モデル錯体を設計・合成し、生体モデル機能を調べています。具体的には、生体モデル機能に対する金属錯体周りの反応場の影響、金属置換法やアミノ酸置換法による複核金属酵素の機能改変、および生体モデル機能を発現する新規材料開発の3点に焦点を絞り組み込んでいます。これら研究課題によって、金属イオン

が生体機能を発現する環境場についての理解を深めること、そして生体類似機能を持つ人工蛋白質を創り出すことを目指しています



Department
of
Chemistry

同位体化学研究室

(放射線科学基盤機構)

スタッフ 吉村 崇 (教授)、永田光知郎 (助教)

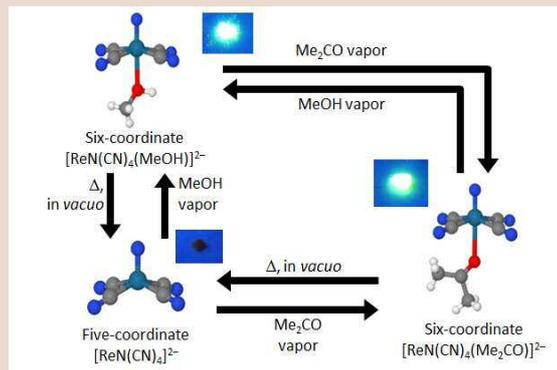
[研究テーマ]

- 1) 核医学利用に向けた超安定キレート剤の構築
- 2) 強発光錯体の設計・合成と発光特性の解明
- 3) 新しいアクチノイド金属錯体の合成と物性解明
- 4) 新しいランタノイド・アクチノイド分離剤の開発

本研究室は、周期表の約3分の1を占める放射性同位体しかない元素に着目して、放射性および関連する金属錯体の新しい性質の解明や、それらの金属イオンを選択的に取り込み、分離するキレート剤の開発を行っています。

現在は、核医学治療で用いられているラジウムを安定にキレートさせるためのキレート剤の合成、発光強度のスイッチングが出来る強発光性金属錯体の合成と光物性に関する研究、ウランの化学的な性質解明のための研究、また、ニーズとしては非常に高いものの、化学的性質が類似しており分離が難しい+3価のランタノイドとアクチノイドの相互分離を行うためのキレート剤の開発を行っています。

また、本研究室がある放射線科学基盤機構附属ラジオアイソトープ総合センターは、学内共同利用施設として放射線に関連した研究・教育の場を提供しています。

Department
of
Chemistry

半導体材料・プロセス研究室

(産業科学研究所)

スタッフ 小林 光 (教授)、松本健俊 (准教授)、今村健太郎 (助教)

ホームページ <https://www.sanken.osaka-u.ac.jp/labs/fcm/index.html>

[研究テーマ]

- 1) 新規化学プロセスによるシリコン太陽電池の高効率化
- 2) シリコンナノ粒子を用いた新機能性材の創製

本研究室では、半導体、特にシリコン太陽電池とシリコンナノ粒子に関連する材料、デバイス、プロセスなどについての研究を行っており、研究成果を実用化して社会に大きく貢献することを最終目標としています。

シリコン太陽電池の理論エネルギー変換効率は約30%ですが、市販品の太陽電池効率は15~18%しかありません。この原因として、太陽電池表面での光の反射や、生成した電子とホールが欠陥サイトで再結合することなどが挙げられ、これらの問題を新規化学プロセスによって改善する研究を行っています。

シリコンナノ粒子と水との反応により体内で発生する水素の生体への研究を行っています。大阪大学医学研究科との共同研究によって、我々が開発したシリコン成分剤が色々な酸化ストレス性の疾病の予防・治療に大きな効果を持つことが分かってきました。シリコン成分剤の表面状態

を巧みに観測して高度に制御することによって、シリコン成分剤の医療効果を高める研究を行っています。シリコン粒子をナノメートルオーダーまで微粒子化することで、新たな特性が得られます。この新規特性に着目し、水を滴下するだけで反応して水素が大量発生する材料やリチウムイオン電池の高容量負極材料の研究を行っています。

新規化学プロセスによるシリコン太陽電池の高効率化

酸化性ストレスで起こる病気
白内障、脱毛症、アルツハイマー病、パーキンソン病、脳梗塞、うつ病、自閉症、糖尿病、動脈硬化、糖原病、慢性腎不全、急性腎不全、膵内フローラの改善、潰瘍性大腸炎、健康寿命の大幅増進+老化の抑制

極低反射率シリコン表面構造の形成
20 seconds

硝酸酸化法による欠陥消滅
HNO₃ → H₂O, H⁺, NO₂⁻, NO₃⁻, O₂, Si

シリコン太陽電池
Liイオン電池
従来の黒鉛電極の10倍の負極容量

シリコンナノ粒子が切り拓く次世代材料

Department
of
Chemistry

バイオナノテクノロジー研究室

(産業科学研究所)

スタッフ 谷口正輝(教授)、筒井真楠(准教授)、田中裕行(助教)、横田一道(助教)

[研究テーマ]

- 1) 電極に接続された1分子の電気特性と熱特性の解明
- 2) 量子化学を用いた1分子DNA・RNA・ペプチドシーケンサーの創製
- 3) 1分子の流動ダイナミクスの解明と制御法の創製
- 4) 顕微鏡による1分子観察

量子化学の手法に基づく1分子科学と1分子技術により、生物の理解に挑戦しています。手法の基礎となる1分子科学の構築を目指して、電極に接続された1分子の電気特性と熱特性の解明を行っています。遺伝情報が、DNA、RNA、ペプチド・タンパク質へと流れるセントラルドグマと呼ばれる概念は、分子生物学の基礎となっています。1分子科学を用いて、DNAとRNAの塩基配列や、ペプチドのアミノ酸配列を1分子で識別・決定し、量子化学から生物の理解に挑戦しています。また、溶液中に存在する生体分子の挙動を理解するため、1分子の溶液中のダイナミクスの解明と、その制御法を開発しています。さらに、

電気的な計測から得られる情報を1分子の現象として理解するため、高分解能な1分子観察を行っています。1分子科学と1分子技術は、生物学、医科学、および創薬を革新すると期待されます。

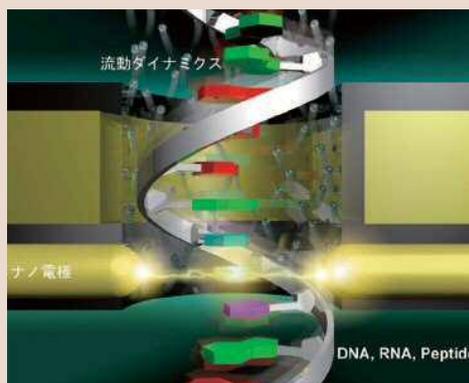


図: 1分子の流動ダイナミクスを制御して、ナノスケールの穴の中を流れる1分子のDNA・RNAの塩基配列とペプチドのアミノ酸配列を電流で読み出す。

Department
of
Chemistry

精密制御化学研究室

(産業科学研究所)

スタッフ 中谷和彦(教授)、堂野主税(准教授)、村田亜沙子(助教)**TEL・FAX** TEL:06-6879-8455・FAX:06-6879-8459 **e-mail** nakatani@sanken.osaka-u.ac.jp**ホームページ** <http://www.sanken.osaka-u.ac.jp/labs/rbc>

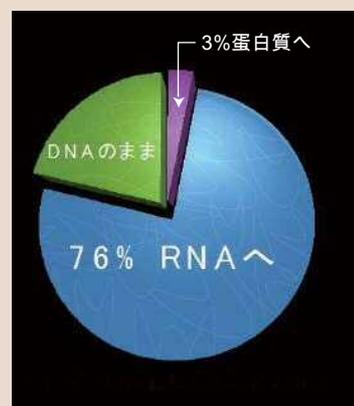
[研究テーマ]

- 1) トリプレットリピート病のケミカルバイオロジー
- 2) 低分子による遺伝子発現調節
- 3) RNAを標的とした低分子創薬
- 4) 実用的遺伝子検出法の開発

中谷研究室では、核酸(DNAやRNA)を化学物質として扱い、有機化学的な視点でその構造と機能を理解した上で、核酸機能を調節する小分子の創製に関わる研究を、有機合成化学と分子生物学を駆使して展開しています。

ヒトは30億塩基対のDNAを持っていますが、そのうちのたった2%しか蛋白質に翻訳されていません。残り76%はRNAまで転写されますが、蛋白質をコードしていません。このRNAは、「翻訳されないRNA」として、ヒトの生命活動を司る重要な機能を持っている事が最近の研究で判ってきました。

RNAの機能を調節する低分子、即ち「RNAを標的とした創薬研究」を世界にさきがけて、有機合成化学を推進力として進めています。「細胞の中で核酸機能を調節する分子」の創製を目指しています。



ヒトゲノム30億塩基対の使われ方

Department
of
Chemistry

機能物質化学研究室

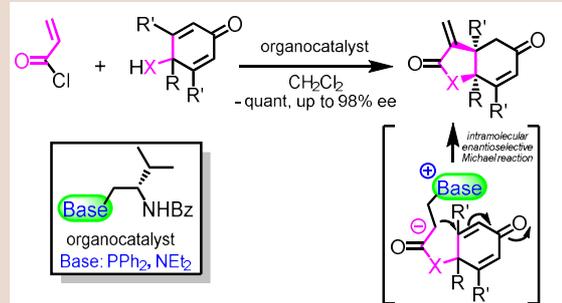
(産業科学研究所)

スタッフ 笹井宏明(教授)、滝澤 忍(准教授)、佐古 真(助教)

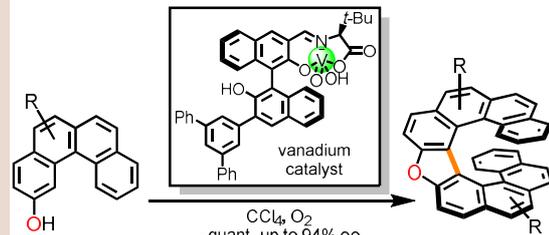
[研究テーマ]

- 1) 新規概念の創出を基盤とするエナンチオ選択的反応の開発
- 2) 多点制御型有機分子触媒の開発と医薬品合成への応用
- 3) 固相担持触媒を利用する環境調和型分子変換プロセスの開発
- 4) スピロ化合物のキラリティーを活用する機能性物質の創製

触媒的不斉合成は、医薬品や機能性材料に用いられる光学活性化合物を効率良く供給可能な高度プロセスであり、省資源・省エネルギーの面からも重要です。当研究室では、酵素的な作用機序で働く多機能複合金属不斉触媒を世界で初めて見出ししています。現在、新しい概念に立脚した汎用性のある不斉合成反応の開拓を目指し、新規な不斉触媒や反応メディアを創出し、それを利用した実用的な合成プロセスの開発を行っています。また、コンピュータを活用した触媒分子の設計や反応メカニズムの解明にも積極的に取り組んでいます。



有機分子触媒が促進するエナンチオ選択的ドミノ反応



バナジウム触媒によるオキサヘリセンの効率的な不斉合成

Department
of
Chemistry

蛋白質有機化学研究室

(蛋白質研究所)

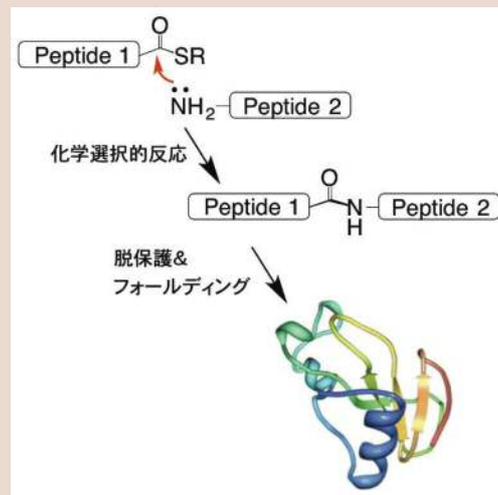
スタッフ 北條裕信(教授)、川上 徹(准教授)、朝比奈雄也(助教)

[研究テーマ]

- 1) 合成ルートのデザイン、合成ブロックの調製、縮合反応等、蛋白質合成法の開発
- 2) 翻訳後修飾を持つ蛋白質の合成ならびに修飾と機能の相関関係の研究
- 3) 膜蛋白質の合成と機能発現メカニズムの解明に関する研究

私たちの研究室では、有機合成法を利用して、化学的なアプローチで蛋白質の機能を研究しています。そのため、ペプチドチオエステルを鍵中間体として用いる効率的な蛋白質合成の開発を行っています。またこの方法を発展させ、糖鎖を持つ蛋白質、修飾ヒストン、膜蛋白質等の合成に適用し、それらの機能の解明を目指して研究を進めています。

また、化学合成を利用して受容体型チロシンキナーゼの情報伝達機構をその膜貫通 - 膜近傍領域に焦点を当て、解析を進めています。



ペプチドチオエステルを鍵中間体とする蛋白質化学合成法の概略

Department
of
Chemistry

機能構造計測学研究室

(蛋白質研究所)

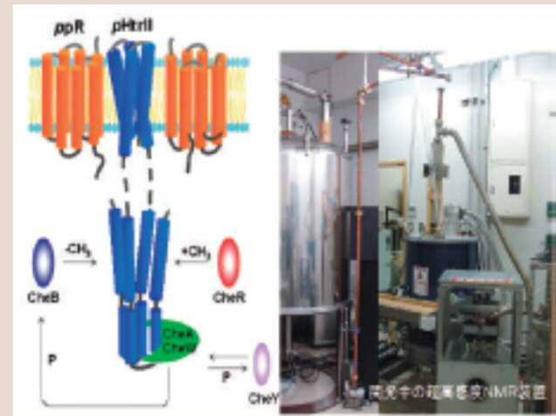
スタッフ 藤原敏道 (教授), 松木 陽 (准教授), 宮ノ入洋平 (准教授、兼任)

[研究テーマ]

- 1) 光情報の伝達に関する膜蛋白質pHtrIIと光駆動イオンポンプである膜タンパク質ロドプシンの構造に基づく機能の解明
- 2) テラヘルツ波を利用した超高感度NMR法の開発と生体系への応用
- 3) データベースなどバイオインフォマティクスを利用したNMR立体構造解析法の開発
- 4) 溶液NMR法を用いた高分子量蛋白質の立体構造、動態と機能との相関解析

私たちの体の中ではさまざまなエネルギー変換や情報変換が生体膜を介して行われています。これらの機能を担っている超分子システムは生命活動のネットワークを作る上で重要です。私たちは、主に核磁気共鳴法(NMR)を用いて、情報変換やエネルギー変換を司る蛋白質の働きを、立体構造に基づいて明らかにする研究を行っています。また、大きな分子を解析するための方法を、物理工学、計算機科学や遺伝子工学を組み合わせ開発しています。

高磁場NMRの高感度化のためには、高輝度テラヘルツ波光源を製作し巨大な分子スピン分極を利用できる装置を開発しています。

Department
of
Chemistry

機能・発現プロテオミクス研究室

(蛋白質研究所)

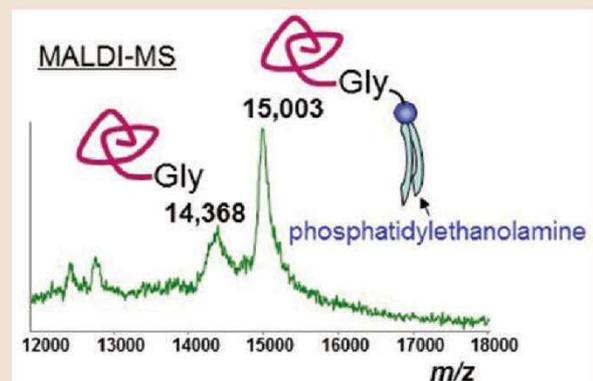
スタッフ 高尾敏文 (教授)

[研究テーマ]

- 1) 質量分析による蛋白質一次構造解析のための化学的手法、及び、解析ソフトウェアの開発
- 2) 高感度質量分析のためのハードウェアの開発
- 3) 質量分析による蛋白質翻訳後修飾の構造解析
- 4) 糖鎖高感度検出のための化学誘導化法の開発
- 5) 生体試料のプロテオミクスとバイオマーカー探索法の開発
- 6) 質量分析におけるペプチド、糖鎖のフラグメンテーションに関する研究

高感度、短時間で分析が可能な質量分析法は、様々な生体内微量蛋白質のアミノ酸配列や翻訳後修飾の解析に利用されてきています。最近では、蛋白質や遺伝子データベースの充実に伴い、質量分析により生体内の総発現蛋白質を網羅的に解析し、様々な生理的現象を解明しようというプロテオミクス研究が盛んに行われています。当研究室では、質量分析によるペプチド・蛋白質の一次構造解析のための化学・分析的

手法や装置の開発、そして質量スペクトルを確度よく解析するためのソフトウェアの開発、整備を行っており、また、それらを用いて生理的に重要な微量蛋白質の同定や蛋白質翻訳後修飾の構造解析も行っています。



PE : phosphatidylethanolamine

Department
of
Chemistry

国立研究開発法人 産業技術総合研究所(関西センター) 無機機能材料研究部門

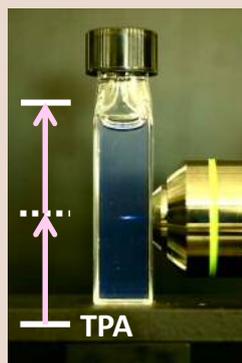
スタッフ 鎌田賢司 (招へい教授)

[研究テーマ]

- 1) 高感度二光子吸収材料の開発および二光子吸収特性と分子構造・電子構造の間の構造-特性相関の解明に関する研究
- 2) 太陽光レベルの光強度で動作する光アップコンバージョン材料の開発と、関与する三重項励起状態の、特に固定系における、ダイナミクスについての研究

2個の光子を用いることで1個の光子では不可能な機能を創生する、言わば「二光子光化学」に取り組んでいます。その1つが1個の分子が2個の光子を同時に吸収する「二光子吸収」であり、蛍光バイオイメージングや、三次元微細造形などに応用されています。その二光子吸収特性と分子構造・電子構造との関係を実測と第一原理計算により研究しています。また、もう一つが太陽光レベルの光強度で長波長の光を短波長の光に変換する「光アップコンバージョン」で、太陽電池や光触媒などの実効効率向上に用いることができるものとして期待されています。

励起三重項が関与するこの過程を結晶性固体で実現することに成功しており、固体中での励起三重項のダイナミクスの解明と制御を通して、より低い励起光で、より幅広い励起波長で、より高効率に波長変換が可能な系についての研究を行っています。



図(上) 二光子吸収による空間選択的励起。

図(下) 太陽光レベルの入射光強度で、入射光よりも短波長でアップコンバージョン発光する結晶性固体材料。

Department
of
Chemistry

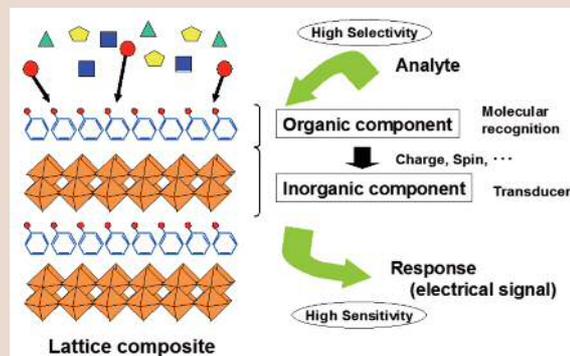
国立研究開発法人 産業技術総合研究所 無機機能材料研究部門

スタッフ 松原一郎 (招へい教授)

[研究テーマ]

- 1) ラティスコンポジット材料の開発
- 2) 有機無機ハイブリッド材料の開発
- 3) 新規材料によるガスセンサの高性能化に関する研究
- 4) 金属酸化物ナノ粒子の製造プロセスの開発

ラティスコンポジットのコンセプトを提案し、これに基づいた新規ガスセンサ材料の開発に取り組んでいます。ラティスコンポジットとは、結晶格子を機能発現のための最小単位として考え、異なる機能を持つ物質を結晶格子レベルで複合化し機能調和させることにより、元の物質に比べはるかに高い機能あるいは新規な機能を示す材料の創製を目的とする技術です。複数種の結晶格子の複合化は、複数種の機能をナノレベルで複合化することに対応します。ガスセンサ材料の開発では、ラティスコンポジットの概念を無機化合物のみならず有機化合物にも拡張し、センサ材料に必要な分子認識機能と信号変換機能をそれぞれ有機化合物と無機化合物に分担させることで、高い選択性を実現します。



Department
of
Chemistry

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 電池技術研究部門

スタッフ 栗山信宏 (招へい教授)

[研究テーマ]

- 1) 蓄電池 (リチウムイオン電池、ニッケル水素電池等)
- 2) 燃料電池 (固体高分子形燃料電池、ダイレクト燃料電池等)
- 3) 化学エネルギー (水素、環境触媒等)
- 4) 材料基礎技術 (ナノ・マイクロ解析技術、計算科学、マテリアロミクス)

固体と分子の相互作用で生じる諸現象 (反応、透過、吸蔵等) を対象として、電気化学や触媒化学を中心とした応用界面科学に取り組んでいます。この研究分野は、物質変換に伴う化学エネルギーの出入りを可逆的に行う蓄電池や燃料電池といった、小型・移動型エネルギーデバイスやエネルギーネットワークに不可欠な技術につながります。多くのプロジェクトで、多様な技術分野や高度な解析技術を融合させるとともに産業界と密接に連携しながら研究を進めています。

Department
of
Chemistry

株式会社 ペプチド研究所

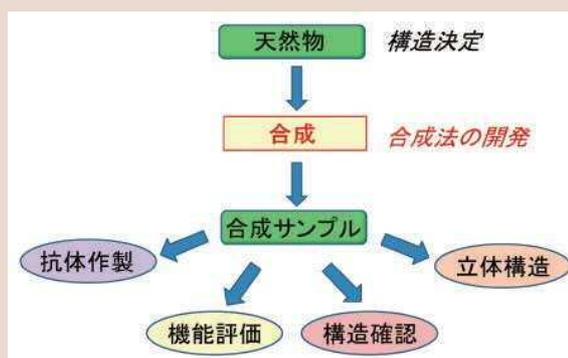
スタッフ 西尾秀喜 (招へい教授)、熊谷久美子 (招へい教授)、山本敏弘 (招へい准教授)

[研究テーマ]

- 1) 蛋白質の化学合成およびその機能と2次・3次構造との関連に関する研究
- 2) 糖関連化合物 (糖ペプチド・糖脂質等) の合成法の開発とその機能の評価に関する研究
- 3) 明確な生理作用を有する天然生理活性ペプチドの化学合成法および構造活性相関に関する研究
- 4) 酵素基質および阻害剤のデザインと化学合成

蛋白質・ペプチド・糖複合体等の合成法の開発および生理機能解明を目指した研究を行っています。タンパク質・ペプチドの液相法による合成に関してはアミノ酸の側鎖官能基を完全に保護して行う化学合成法を基本に、合成中間体であるペプチドフラグメントを固相法により簡便に合成する方法や合成中間体の溶解度等を良くするための保護基や溶媒系の開発などを行っています。またシステイン間のジスルフィド結合形成やその時に生成する異性体などの解析を行い立体構造との関連を検討しています。一方、糖複合体の合成の

ために糖誘導体の合成や脱保護条件に対する糖鎖の安定性の検討を行い糖ペプチド等が収率良く簡便に合成できる方法の開発を目指しています。このようにして合成したサンプルを用い、その生理活性発現のメカニズムを解明するために国内外の研究者と共同研究を行っています。



Department
of
Chemistry

公益財団法人 サントリー生命科学財団
生物有機科学研究所

スタッフ 島本啓子 (教授)

[研究テーマ]

- 1) 糖脂質の新しい生体機能の解明
- 2) 生体膜中の脂質の機能解明
- 3) 生体分子の機能化

複雑な生命現象の中には、有機低分子、糖鎖、脂質などの非タンパク質性分子の作用によるものも多く、その理解のためにはNMRやMSなどの最先端機器分析による分子の同定と有機合成による分子プローブの創成が必要です。

生体膜は主成分のリン脂質以外にも微量の糖脂質などを含みますが、これら微量脂質類の役割や生物学的意義はまだはっきりと分かっていません。生体膜の機能解明が遅れている原因は、分子生物学的なアプローチが難しいことにあります。我々は、大腸菌膜に膜タンパク質を挿入するはたらきをもつ新しい糖脂質 MPIase について、有機化学的手法により構造を明らかにし

ました。さらに、化学合成したリガンドを用いて、生体膜と糖脂質との相互作用を解析するモデル系を構築することにより、複雑な生命現象の機構解明を目指しています。

